



「第47回科学講演会」開催のお知らせ

財団法人 東レ科学振興会

大勢の方々に科学に対する理解と関心をいっそう深めていただく目的で、昭和38年以来毎年科学講演会を開催いたしております。本年も下記の通り開催することになりましたのでご案内致します。

記

と き：平成9年9月30日(火) 18時00分～20時45分
 ところ：有楽町朝日ホール(有楽町マリオン11階)
 東京都千代田区有楽町2-5-1(JR有楽町駅前)
 テーマ：“光でどこまで、光はどこまで”

I. 集まる光、広がる光—発展する光エレクトロニクス—

東京工業大学精密工学研究所長・教授
 伊賀健一

II. 光で見えないものを光で見る、あやつる、加工する

東京工業大学総合理工学研究科・教授

大津元一

その他：入場無料、定員638名

(当日会場先着順・開場17時30分)

予約の必要はありません。

出席者には、後日講演記録を進呈いたします。

主 催：東レ科学振興会

後 援：朝日新聞社・応用物理学会・

電子情報通信学会

編集後記：東京では6月9日の平年並みの梅雨入りとなった。これまでのところ梅雨前線は比較的小となし、災害を引き起こすような大雨を降らしてはいないようである。数値予報モデルの開発に関わっている関係上、生命や財産が失われるような重大な災害が発生しやすいということもあるが、数値予報モデルにとっても予報が難しいため、この時期の天気予報の当否には気を使う。日々、一喜一憂といったところである。数値予報モデルにとって、移動性の前線に伴う降水や季節風に伴う地形性の降水(雪)に比べて、梅雨時に見られる停滞した前線のわずかな南北運動に伴う天気変化を予測するのは、相対的に難しいようである。他の季節のような傾圧性の強い場合に比べて、不確実性の大きい水蒸気の凝結にともなう非断熱効果が相対的に大きいことなどが原因と考える。モデルの水平解像度の不足という問題もあろうが、停滞して長時間に

渡って降り続く大雨の予測なども課題を抱えている。

前回の編集会議で、気象学会への気象予報士の方々の参加が多くなってきたこと、その方々から「天気」でもっと予報現場で役に立つ情報を取り上げて欲しいという要望が聞かれたこと、などが話題に上った。編集委員会でも、気象予報士制度が始まったことなど、最近の気象学会を取り巻く状況の変化を受けて予報現場の人達に役に立つ情報を提供するような企画は作れないかについて、これまで1年以上にわたって議論してきている。この話題はほとんど毎回のよう編集委員会で取り上げられている。しかし、安定的に記事を供給できることなど、企画としての条件を考慮するといまだ、名案が浮かばないという状況である。なにか新しい企画のアイデアがありましたら、編集委員会まで要望をお寄せください。(中村誠臣)